

## 平成元年を振り返って

会 長 挨拶

原 田 種 臣

平成元年は、当学科創設80周年を迎えた意義ある年でした。このため、4月28日午後記念式を挙行し、平山博理工学部長から祝辞を、名誉教授房村信雄先生より「資源工学科の歩み」と題する講演を、また校友の新井明日本経済新聞社長からは、「日本経済と資源」と題する講演を頂き、出席者一同感銘深く拝聴しました。当日夕刻6時からは、大学校友会館3階の全フロアを借切って記念総会および懇談会を盛大に催しました。出席者は213名を教えました。

上記総会参加費のうち2,500円分を、資源工学科学生の奨学基金として御寄付をお願いしましたが、当日欠席のかたを含め561名の方々の御賛同を得て150万円の基金が集まりました。とくに、昭和29年卒の惣前保氏（辰栄建設株式会社社長）からは10万円の寄付を頂戴しました。皆様の御厚意に心からお礼申し上げます。

続く朗報として7月に、昭和25年卒の吉澤兵左氏（吉澤石灰工業株式会社社長）より奨学基金として100万円の寄付を頂戴しました。この寄付金については、大学本部が吉澤奨学基金規程を制定し、基金の果実を毎年資源工学分野大学院学生2名分の奨学金に当てることに決まりました。吉澤氏の御好意に厚くお礼申し上げる次第です。

次に大変悲しい出来事ですが、山崎純夫教授が心肺機能不全のため12月4日に死亡されました。先生は昭和21年9月本学採鉱冶金学

科を御卒業後、大学院特別研究生として研究生活を送られ、23年10月より雄別炭鉱鉄道株式会社に奉職されました。35年4月、助教授として母校に迎えられ、41年4月からは教授として研究・教育の任を果たされ、多くの業績を残されました。先生は講義科目としては地学（学部1年）、地質学（学部3年）、層位学（大学院）、堆積岩持論（大学院）等を担当され、研究活動としては石灰組織学および古生物に関する研究を推進されて優れた成果を収められました。昭和56年には応用石炭組織研究会という全国規模の研究組織が結成されましたが、山崎先生は初代会長として、亡くなるまで会の発展に尽くされたのであります。当学科にとり、かけがえのないかたを失いました。

12月末に新しい会員名簿が完成しました。前回の発行は57年3月ですので、8年分の卒業生が新たに加わっています。資源工学会学年幹事の皆さん、岩崎孝教授および米持賢治職員の苦心の賜物です。是非御愛用下さい。

平成2年4月からは、内田悦生専任講師を迎えることになりました。同君は、平成3年3月御定年の今井直哉教授の後継者です。紙面の都合で、同君の詳しい紹介は省略しますが、会報第22号の「早稲田を出てから10年」と題する同君の一文を思い起こして下さい。

その他の異動としては、平成元年4月から大和田秀二講師が助教授へ昇進、大学院教授も担当して貰えるようになったので、原料工

学部門の教育活動が一層強化されました。また平成元年6月1日付で事務室の高山真理子さんが本部のほうに転出され、後任として吉田喜代子さんが本部からこられました。

さて最後に理工学部の新棟建設計画について御報告し、皆様方の御支援をお願い申し上げます。大学院棟と理工学総合研究所センター合わせて6000余坪の建物を、当キャンパスの明治通り側に70億円の予算で建てようという計画です。所要経費70億円のうち、30億円を募金で賄うことが前提になっております。大学院学生の益々の増大（当学科でも卒業生の4割が大学院へ進学します）へ対応するため、また従来の理工学研究所を改組し、研究室や機器室を充実するためには、上記の建物が不可欠というのが一致した見解です。本年中に募金を推進し、平成3年1月に着工、4年9月に完成の予定で計画が進められています。御理解、御協力のほど重ねてお願い申し上げます。

資源工学科教授（昭和22年鉱山地質、昭和25年採冶卒）

故 山崎純夫教授を偲んで

追 悼

故 山 崎 純 夫 先 生



平成元年12月4日逝去

昭和21年9月 早稲田大学理工学部採鋳冶金

学科卒業、大学院特別研究生  
と在籍

昭和23年10月 雄別炭鉱鉄道株式会社入社  
昭和35年4月 早稲田大学理工学部助教授  
昭和41年4月 同学部教授  
昭和56年より 応用石炭組織研究会会長  
平成元年まで

山崎純夫教授の逝去を悼む

今 井 直 哉

かねてより病氣療養中の山崎純夫教授が昨年12月4日午後6時30分忽然として世を去られた。痛恨これきわまりない。私は、ちょうど所要で11月29日から12月4日まで韓国に出張し、12月4日午後5時05分ソウル発のUAL826便で7時頃成田に到着し、帰宅して訃報をきいた。思えば、ちょうど飛行機が東京国際空港をめざして着陸態勢に入るところ山崎教授は世を去られたのである。

私と山崎教授とのつきあいは古く、出会いは第一早高の時代に溯るが、同じ地質学専攻者ということもあって、大学時代には秩父盆地の新第三系や山中地溝帯の中生界のマツピングにたずさわり、一緒に石をハンマーで叩いたことを思い起す。

その後、第2次大戦もたけなわになって、現岡山大学名誉教授の杉山隆二先生の戦時研究「日本の水銀鋳床の地質学的研究」のお傳いとして、山崎教授と一緒に紀伊半島の中央変位線に沿って分布する水銀鋳床の地質調査を行った。不思議なことにこの間の記憶は全く消えうせ、どこを一緒に歩いたかはさだかでないが、一日の外業を終え、宿で杯を交わし、酒に酔うと、寡黙な彼が時々味のある面白い言葉をボツボツもらしたことを思い起す。

私が昭和25年新潟大学理学部へ転出し、昭和38年母校に復帰するまでの13年間は山崎教授とのおつき合いはあまりなかったが、昭和38年6月以降27年の長きに亘り、資源工学科の同僚教員として日常親しく接する機会に恵

まれた。口数が少く、静かで温和な人柄で、黙々として研究・教育に励むタイプで、生前石炭岩石学・古植物学の分野で数々の優れた業績を挙げられた。

“人は死すべきものなり”という言葉のように、人との会合は同時に別離を意味するが、山崎教授より年上の私がここに弔辞を捧げることになった。かえすがえすも残念である。

山崎純夫教授、安らかにお眠り下さい。

(1990年3月)

資源工学科教授(昭和20年採冶卒)

### 山崎君と過ごした学生時代の思い出 国井敏雄

山崎君と私達が採鋳冶金学科第1分科に入学したのは、今より47年前の昭和18年の10月でした。クラスは全員で15名。戦局はその年のはじめ、ガダルカナル島の撤退アツ島の玉砕と不利になって来たが、学園の中は平和で授業は時々休講もあるが普通に行なわれていた。人数が少ないので相談はすぐきまり、11月には足尾銅山に見学に行くことになり、足尾を見学1泊、翌日半月峠をこえ、日光へと徒歩にて行き非常にくたびれたが、山崎君たち数名が健脚であったのを思い出します。その後或る日、教室に山崎君がドイツ語の本を持って来て、「これはベルグバウクンデだが皆でこれを読み合せしないか。」とのことで、エライやつがいるもんだと感心したもので、私は到底無理と思い参加しなかったが、数人で行っていたようでした。

戦局はその後ますます悪化し、学園内は文科系の学生が入営したため、なんとなくさびしくなっていた。翌年2月には古河鋳業の久根銅山に1ヶ月の勤労奉仕と一緒にいき、坑内で作業員と共に働き非常にくたびれました。

その前の冬休みに、3年の卒論の手伝いに別市銅山、短い夏休みに夕張炭鋳に実習に行ったが、何れも彼はどこへ行ったか思い出せません。10月になると2年進級、サイパン

島の玉砕、レイテ沖海戦の敗戦と続いた戦局に、12月はじめ1年間の勤労奉仕に行くことがきまり、三宅先生と中野先生の御尽力により、行き先は軍需省航空兵器総局輸送部で、その説明会の当日突然山崎君が、「僕は今回の勤労奉仕には皆と一緒に行かない。早瀬さんの実験を手伝うため学校に残る。中野先生にも了解を得ている。」と言ったのでビックリしたことであった。

私達の勤労奉仕は翌年の8月15日の終戦の日まで続いたが、山崎君の実験も同じように続いたと思われた。その間1度私は軍需省より大学に用があり、山崎君のいる4階の実験室に寄ったら、彼はパイライトの単結晶の入った多数の瓶にかこまれ、電気整流の実験をしていた。

終戦後勤労奉仕も解かれたが、残務整理もあり、やっとおちついたと思ったら10月で3年生になっていた。そのうち授業が始まり卒論を仕上げなければならなくなったが、山崎君は今迄のデータをまとめれば良いとのこと皆からうらやましがられた。卒業後山崎君は大学院に残ることとなり、私達は就職して散っていった。彼はその後教授となられたが、長年にわたりクラス会の万年幹事として、我々は大変御世話になったのである。今回病いにたおれ、やり残した仕事が気になって残念だと病床で話され、そのうち筆談で話をするようになって、ついに亡くなられてしまいました。もっと長く生きてもらいたかったと残念に思います。謹んで御冥福を祈る次第です。

相模エンジニアリングサービス

(採冶 昭和21年9月)

### 山崎純夫君との日々を顧みて

山本 学

「山崎先生」というより、私にとっては「山崎くん」とか「おおい、山崎くんよ!」と呼びかける方が自然である。卒業年度が4年か5年位ずれているから、どう考えたって先輩

であった普通なら「山崎くんよ」などとは呼ばれない。ところがどうしてもこのような呼びかけになってしまうのは、我々のつき合いが過去60年間続いていたからである。

まだ小学校に入る前だったから5歳か6歳の頃、幼稚園からの帰り途彼と出合ったのが最初である。彼はその時、大きな立派な黒塗りの凧を手にして独りポツンと道端に立っていた。何でその時彼が一人で凧を持って立っていたのか分からぬが、彼は時々そんな形で立っているのが亦、後年の生き方でもあったような気がする。彼のタコアゲ技術は名人級であった。よく春日町の空地で上手に凧を操っていた。私は女のきょうだいばかりで、お手玉とかおままごととかの手順は知っていたが、タコアゲは苦手で彼の技術とは月とスッポン位の格差があった。

その後小学校では組が別々ではあったが同級生で、時々二人並んで、殆どお互いに口をきかずに家に帰った。別にケンカしていたわけではない。中学校へは行ったら、同じ組に彼が居た。中学校は我々の自宅から3キロ足らずにあったから、毎日同じ時刻に家を出て、白い帆布製のカバンを抱えて、学校までジョギングした。時々始業ベルが鳴り終わった頃校門に入ることもあったが、彼はすばやく土足のままで教室に入り、私は上履にはき換えてから教室に入り、私だけが遅刻となった。

その中に私は休むことが多くなって一年遅れ、彼は私を置いてけぼりにして、早稲田第一高等学院理科に入学してしまった。今度は走る方向が逆なので、朝路上で会っても「オース」と挨拶する丈の時間しかなかったが、夜になると中学時代と同じように自宅へ遊びに来ては、色々新しいことを教えてくれた。

間もなく戦争が始まり、思い起すのもいまわしい数年が続いた。敗戦で家に戻ってきてから、最初に連絡した先が彼のところであり、そしてその翌年から中断していた学生生活をはじめたところが、やはり早稲田第一高等

学院理科であった。学院時代から将来何を専攻するか決めていたし、又そのような時に大きな影響力を与えていたのは、やはり彼であった。

同じように地質学の本を読み、鉱山や化石をたずねて一緒にフィールドを歩いた。彼は先輩だから、彼から教わるのは当たり前だと言って、私は何事も彼のところに持ち込んだ。ずっと経ってから、彼がドイツへ行きエッセンにある石炭研究所の客員として滞在していた頃、私も仕事上半年ばかりドイツに居り、二人で何日か一緒にフィールドを歩いた。この時ばかりはドイツに関しては私のほいが先輩と威張り、彼に色々教えたが、今よく考えてみると、ワインの飲みかたとか、安宿の泊まり方だとか、余り自慢にならない俗事ばかりであって、少々気がひける。まあ、許してくれや。

山本機械通商(株) (鉱山26年卒)

### 山崎純夫先生を悼んで

岡田清史

夕暮れもまぢかなオーストラリア・クィーンズランドの広漠たる荒野を、希望が少しずつすぼまってゆくような心細い感じにとらえられながら、一直線にレンタカーを運転していました。地形の特徴もなく、目標物もない、地図には一本の曲りの乏しい道路と幾筋ものか細い涸川の他には何もなくて、ただ緯・経度が碁盤目のようにあるだけで、ヒントは町から何十キロメートル、ゆるいカーブを越えた涸川というだけ、岐れ路を間違えて農場に入込んだり、その分距離の感覚を失ったりして、暮れゆく夕日をうらめしく思いながら、心もちのカーブ地点をすぎた涸川の上で、最後のチャンスとばかりに、車を停めました。涸川の上といっても道路の下を土管が走っているだけで、これが目指した地点なのかどうか確認のしようもありません。薄暮はせまり、足もとの見分けがつかなくなるまで1時間たら

(資源昭和46年卒)

## 卒業生便り

### 「新しい時代への石油開発

鎮守次郎

ずという状況で、その涸川を数十メートル歩いたでしょうか。そこは、涸川の床に敷きつめたザクザクとした硅化木のじゅうたんで、これこそ山崎先生をご案内すべき、私の使命でありました。転石とはいうものの、この地域の硅化木の出所は限られており、これが山崎先生長年のご希望でありました古生代二疊紀ポーエンベースンに産するグロッソプテリスという樹木の化石のようでありました。足もとが見えなくなるまで、夢中の採集が行われ、これでようやく、タスマニア島巡検、古植物国際会議、ポーエンベースン炭鉱調査、グロッソプテリス木部化石の採集と続いた先生のオーストラリア旅行(1988年8-9月)の喜びを共にすることができ、当時は正直に言ってホッとしたという次第でした。今では、これが、関東山地をはじめとして数え切れないほど野外の調査におともさせていただいた最後の思い出となってしまいました。

先生は、近年、石炭研究のかたわら、日本各地の中・古生代植物の木部化石の研究に打込んでこられました、この分野では世界的にも数少ない研究者のひとりとして、研究を進展させ、上記メルボルンの国際会議では、関東山地産出の石炭化した木部化石についての他では例のない研究をされました。これは、堆積岩中に含まれる微小な石炭化木部化石を3つの定まった断面に切出し、研磨して顕微鏡下に鑑定するという根気の要る仕事ですが、先生の忍耐強さと古植物解明にかける情熱とを端的に物語る成果と言えましょう。

グロッソプテリスの木部組織の解明は、私もその結果を楽しみにしていたひとりでしたが、遂に先生ご自身の手で行われる機会を失ってしまい、誠に残念なことと言わざるを得ません。山崎先生が教えてこられた、石炭と関連物質の工学と理学にまたがる広範な研究の発展を願って、心からご冥福をお祈り致します。

財団法人石炭技術研究所

世界各国は第一次、第二次の石油ショックということを経験し、エネルギー構造の中で石油の占める割合は依然大きく、石油価格の動向は各国の景気変動に大きく関わっている。将来のエネルギー構造の中で、今後とも石油が重要な位置を保ち続けることは、他のエネルギー開発に色々な問題が山積し、軌道に乗らないことからして間違いのないことであろう。しかし、この石油資源にも問題は山積している。

その一つは、今後の石油の可採鉱量である。今後、世界各国が、ある程度の経済成長をなし遂げるに必要な重要予測に見合うだけの発見鉱量が追いつかないのである。それは、探鉱地域が極度に条件が悪い所に移行しており、石油発見率が上がらず、探鉱意欲が上がらないのが現状だ。

その二は、地球環境汚染の問題がある。地球温暖化の原因の一つが化石燃料中の石油、石炭の消費によるとされている。それは、温室ガス効果の49%が空気中のCO<sub>2</sub>によりもたらされ、しかも、そのうちの57%が化石燃料によるとされている。とはいえ、我々石油開発に携わる者として、最近の石油価格の上昇基調は追い風となってきており、探鉱投資意欲が増加しつつあるといえる。石油開発コストの増加及び石油価格の上昇は逆に石油開発技術の向上となって現れており、今我々は新油田の発見と既存油田の回収率増加技術の両面に取り組んで行かねばならない。

既に、これらの両課題に、当資源工学科の卒業生が国内外で200名以上も従事しており、エネルギーマンとして日本経済のために多大の効果を上げている。

21世紀を迎えるまでの今後10年間は、人類にとってエネルギー問題を考える重要な10年間になると言われている。環境と経済とベストミックスで構成されたエネルギーの三者バランスをよく解決し、グローバルな視点での石油資源の開発を積極的にチャレンジしようとする時に、当資源工学科の将来像を大いに期待せずにはいられません。

我々卒業生は、こうした使命感を改めて認識し、今後とも多くのエネルギーマンを新しい時代が要求している時、更なる前進を果たさなければならないと考えている。

帝国石油(株) (鉱山昭和34年卒)

## エジプトの石油雑感

戸部 昭 義

1988年2月より1990年1月迄の2ヶ年エジプト国に滞在し、石油開発の仕事に携わって来ました。エジプトは常に太陽に容赦なく照りつけられる気候と想像されがちですが、夏期冬期に区別され冬期はヨーロッパの厳寒から逃れ、一時雲一つない空と太陽を求めて観光客が押し寄せ、最大の観光シーズンを迎えることになります。

話を軌道修正してエジプトの石油事情について簡単に触れて見ますと、同国の石油開発歴史は古く1880年代に溯り、数年前に100年記念行事が盛大に行なわれた。この石油発祥の地、ゲムサ油田はカイロから南に約450km、スエズ湾に面した小高い岬に位置している。如何に油田の寿命が長いと云っても、すでに昔の面影はなく全てが瓦礫化し自然の砂漠に戻っている。ここに至るスエズ湾内、及びその海岸線が所謂、石油銀座で中小の油田群が規則正しく点在している。エジプトの油田規模は総じて小粒だが、その中でモルガン油田(鯛の意味)が飛抜けた存在である。最近、再びエビ漁場に油田ありの諺が復活しているが、ここでは鯛漁場と云ったところか。この油田の開発経緯には1つのエピソードがある。殆

どの油田から産出される原油は、離岸距離の短いシナイ半島側に陸上げされているが、この油田だけは当時の経済性を無視して東部砂漠側に送油ルートを求めている。このため、中東戦争ではその存在を充分知らしめたと云われている。

外貨獲得にとって重要な位置を占める石油探鉱は、残存鉱量が比較的少ない事と相まって、エジプトにとって永遠のテーマである。数年来の石油価格の低迷は海外出稼者の送金額、石油収入の激減をもたらし、変わってスエズ運河通行料収入、観光収入を押し上げる結果となった。

昨今の異常気象の煽りで渇水のピンチに見舞われたが、数千年変わる事なく、とうとうと流れるナイル河とそのグリーンベルト境界に点在する遺跡群は世界の観光客を魅惑し、石油資源に代わって観光資源が一役脚光を浴びた感がある。

エジプトの悩みは著しい人口増加率であろう。10ヶ月に百万人の割で増え続けていると云われている。このため、遺跡周辺の環境を変え、数千年来保存され続けた基調な遺跡は、数百年の単位で破壊されてしまうと警告している。観光資源も無限ではなさそうである。

エジプト石油開発 (昭和41年卒)

## トルコ紀行

南 和 雄

私は、原油二・三次回収技術研究組合へ出向になり、炭酸ガスおよび水蒸気圧入攻法によるEORパイロットテスト場として選択されたトルコ共和国に、昨年(平成元年)、これら坑井掘削開始時点から、約5ヶ月間長期出張でその現地に行ってきた。ここでは、この滞在中に受けたトルコに於ける印象を感じたまま綴ってみる。

この国は、御存知のように、国土の3%がヨーロッパ側、97%がアジア側とボスポラス

海峡で分けられており、所謂アジアとヨーロッパのふたつの顔を持つ国として知られている。更に特異なことは、人口の99%がイスラム教徒にも係わらず、他の中東イスラム教国のような敬虔な信者が少ない。そんな訳で、アルコール類は自由に買って飲めるし、バー、クラブ等の飲食店は西欧と変わらず、この方面では不自由しない。特にトルコ産ビール、ワインは我々日本人によく合い、更に安価ときているからその味も格別である。トルコ焼酌(アブサンと同類で水を加えると白く濁る)もあって、こと飲酒にかけては日本にいるよりも快適な生活が可能である。又過去に長期滞在した事のあるUAE、サウジアラビア等で聞いたモスクからのコーランの音が、殆ど聞こえてこないといった事からも、イスラム教国といっても、異質な国だということが窺える。

さて、歴史の宝庫といっても過言ではないこの地は、ヒッタイト、ビザンチン、セルジューク、オスマン等と、歴史には、過去4度も統一国家が建設されており、これらの遺跡がトルコ国全域にわたっている。現在も世界歴史学者による遺跡発掘作業が盛んである。又各国からの観光客も増えて来ており、遠く日本からも多くなってきているとの事。奇岩の町で有名なカッパドキア、地中海沿岸等を含めた観光地の整備もいまいちであるが、これもトルコ国内の経済力の回復を待つ事として、イスタンブールには、オスマントルコの絢爛たる当時の生活を偲ばせてくれるトプカピ宮殿、ブルーモスク等があり、その壮大さに圧倒されてしまう。

ところで、EORパイロットテスト場のイクステペフィールドは、シリアとの国境沿いのヌイサイビン市近郊にあり、近くにはシルクロードが走っていて、原油を満載したタンクローリーの往来が激しい。このフィールドの油は、AP1-10°と超重質油のためTPAO(トルコ石油公社)により、産出されずにそ

のまま休止井となっている。このため、炭酸ガス及び水蒸気圧入攻法で産油可能かテストしてみようと、日本、トルコ両国の共同研究の場として選定されたものである。作業も順調に進んでおり、1993年には何らかの答えが出るものと、多いに期待されている。

いづれにしても、親日的なトルコ人と一緒に5ヶ月働いて来た私にとって、アジアとヨーロッパの接点となっているこの地を、皆様方に機会があれば是非訪れて頂きたいものである。

帝国石油(株)削井部(昭和43年、資源工卒)

## 在 学 生 記 録

資源工学科(採査開発研究室)での思い出

エディ・プラセトヨ・ウトモ

昭和59年、私はこの早稲田大学理工学部資源工学科の大学院に、インドネシア石油(株式会社)からの奨学生として入学しました。初めて日本に来て最初修士1年の時には大へん大きなカルチャーショックを経験しました。例えば会話の内容とか、質問する時に許される質問の内容はインドネシアの範囲と日本の範囲では大へん違っていることに驚きました。日本ではあいまいなことが大へん多く、またお酒を沢山飲むのは初めて経験しました。日本人は個人主義が強いと思いました。したがって日本の社会には入りにくいと思っていました。これを克服する為に勉学に没頭しようと思いました。しかしその気持ちがあくまで少なくなり逆に次第に友達ができ、勉強の上でも良い雰囲気が出てきて、研究も進むようになってきました。そして次第に悩むことも少なくなり、今は日本の友人が沢山できて、寂しいことはなくなってしまいました。また困る時には友達が相談に乗ってくれました。

そろそろ国に帰ることになり、沢山の日本の友人とサヨナラを言う気持ちは重く感じられます。ずっと永く、お付き合いしたいという気

持ちで一杯です。ここで授けられた学位を基に、さらに研究を自国で重ね、成果を上げたいと思っています。

インドネシアバンドン地質技術研究開発センター  
(資源博士後期, 平成2年修了)

### 南極地域基礎地質調査に参加して

谷 仁 志

12月5日に日本を発ってから約70日の間、私は南極大陸沖合いの海域で地質調査をして来ました。そもそも石油公団から届いた一通の手紙が事の始まりで、それは公団が毎年行なっている南極地域の基礎地質調査に補助調査員として学生を推薦して欲しいという内容のものでした。この南極調査に参加することにした理由はいくつかあったのですが、その一つに私の研究室の先輩である高村浩さんからの助言があります。高村さんも昨年同様の調査に参加し、非常に有意義な体験をしたとアドバイスしてくれたのです。私にとっても南極という、あまり人の行かないような所へ若いうちに行けるというのは魅力でした。このようなことから私は南極行きを決めたのです。

本調査は、南氷洋のエンダビーランド沖海域(東経60度から90度南緯60度以南の範囲)を地質調査船「白嶺丸」を使用して調査するもので、調査団員は19名、白嶺丸乗組員は35名、総勢54名が12月10日にオーストラリアのフリーマントル港を出発しました。調査の内容は海底地形調査や地震探査等で、私の配属先で行なったのは主に海底の表層堆積調査でした。これはグラビティーコアラと呼ばれる柱状採泥器を海底に投下して実際に泥を採取するもので、採取後の泥は軟X線写真を撮ったり、スライドを作って顕微鏡観察を行ったりして処理します。今回は全航海を通じて6点、この採泥を行ないました。

私が船上生活でまず困ったのは船酔いでした。南緯45度から55度にかけての海域は暴風

圏と呼ばれていて、片側だけで船が30度以上も傾くために体が揺れに慣れず、調査海域に着くまでは大変でした。しかし不思議なもので、一度、揺れに慣れてしまうと帰りの暴風圏内では船がいくら揺れても平気でした。これも個人差があり、全く酔わない人もいれば、ひどく酔う人もいるのでしょうか、私はこの程度で済んで良かったと思っています。しかし、大変なことばかりだけでなく、氷山、鯨、ペンギンと珍しいものを直接見る事ができました。中でもすばらしかったのは、オーロラでした。本調査は南半球が夏の時期に行なわれたので、調査海域では夜でも太陽は沈みません。そのためオーロラを見ることができるとすれば行き帰りのわずかな時間の中だけでしたが、運良く帰途についた2月4日にこの素晴らしい現象を見ることができました。私が見たオーロラは薄く緑がかった白色で、まるで雲が発光しているようでした。わずか30分程だったと思いますが、とても感動的でした。

今回のこの調査を通じて、地質調査とはどんなものかということを経験されたことは貴重な体験でした。やはり、机上の勉強だけでなく、実際に見たり、触ったりすることによって理解を深めるということは重要なことではないでしょうか。もちろん大変なこともありましたが、他では決して得ることのできないようなことも体験できました。また出発前には不安もありましたが、今、考えると本当にこの調査に参加できて良かったと思っています。私にこのようなチャンスを与えて下さった皆さんに感謝したいと思います。

(早稲田大学大学院理工学研究科)

### 資源工学科の動き

平成元年度

#### 1. 資源工学科日誌

4月1日(土) 入学式。教室人事:大和田秀



二君助教昇任  
4月28日(金) 資源工学会総会午後6時より  
校友会館で開催, 222名の出席者  
をえて盛会裡に修了。  
5月12日(金)13日(土) 理工スポーツ大会,  
従来通り河口湖畔で開かれる。  
5月20日(金)21日(土) 新入生オリエンテー  
ションを追分セミナーハウスに  
て実施  
6月8日(木) 大学院推薦志願者面接  
6月12日(月) 平成2年度修士過程推薦入学  
者決定 資源22名, 教育1名  
9月8日(金) 大学院入試(筆記)  
9月14日(木) 大学院入試(面接)  
9月22日(土) 平成2年度修士過程入試合格  
者決定 資源  
10月12日(木) 資源工学会幹事会  
10月28日(土) 平成2年度一般高校推薦入学  
者面接8名  
11月3日(金)4日(土)5日(日) 第36回理工  
展  
11月11日(土) 資源女子会, 生協レストラン  
で開催  
12月5日(火) 故山崎純夫教授 自宅にてお  
通夜  
12月8日(金) 故山崎純夫教授葬儀 午後1  
時より宝仙寺で神式により行わ  
れた。  
12月16日(土) 3年生現場実習報告, 石油,  
地熱, セラミックス工業, ウラ  
ン鉱業等の見学・実習が中心で  
報告された。  
2年1月8日(月) 資源工学科新年会 午後  
6時より校友会館で開催, 非常  
勤講師12名を中心に学内14名の  
教職員で懇談・会食した。  
2月13日(火)14日(水) 学部卒論審査  
2月15日(木) 大学院修士論文審査  
2月19日(月) 理工学部入試  
3月25日(日) 卒業式, 学位授与式。資源工

学科卒業生68名(内女子10名),  
大学院修士過程終了者27名  
(内女子1名)

## 2. 最近の留学生事情

最近早稲田大学では留学を希望して入学し  
て来る外国人も著しく多くなって来た。資源  
工学科でも, その傾向がとみに目立ってきた。

本年度理工学研究科に受入れることになっ  
た留学生は49人で, 資源工学分野では4人,  
この他 後期(博士)過程で1人であった。  
その国籍は中国4人, 韓国1人である。学部  
生は現在4年生まで7人, 大学院生6人で,  
学部生ではマレーシアからの留学生4人が最  
も多く, 台湾, インドネシアの留学生である。  
また在学中の大学院生は1名を除き, 博士過  
程の学生は殆ど, インドネシアからの留学生  
であるが, 他は中国, 韓国, リビヤからの留  
学生である。この他本年は各国から研究を目  
的にした訪問研究者, 教授の方々の滞在希望  
も増加し, 資源工学科こそ国際的に交流の活  
発な学科になるだろうことを期待している。

## 3. 最近の就職事情

ここ数年, 資源工学科卒業生の就職動向は  
著しく変化している。全般的には極めて良い  
就職状況であるが, 専門分野の企業に務める  
希望者が少なくなった。特に一般的傾向に従っ  
て金融, 証券に向う学生が増加している。早  
稲田学報によれば資源工学科の学生で, 銀行,  
信託業を選んだ学生が昭和63年度で37人中12  
人, 電気機械器具製造業で7人, となってい  
る。これは学部学生に限られてはいるが, 当  
学科では全く心細い限りである。今後資源方  
面の開発に当る各企業に人材を送り込むよう  
努力しなければ先輩に申し訳ないと思ってい  
る先輩方からの強力な誘導をお願いします。  
平成元年の就業状況については, 次表に示す  
ようです。

平成元年度卒業予定者の進路 (学部)

氏名	進路	氏名	進路
青木 幸太郎	小松製作所	高崎 直子	早大大学院
青山 君男	アイシン精機	鷹野 宏輝	旭化成工業
芦野 慎	東工大大学院	高橋 正樹	富士電機
阿部 淳子	早大大学院	武智 裕子	富士銀行
粟津 一雄	東工大大学院	竹中 和久	富士写真フィルム
安市 健二	日立製作所	立川 和法	三菱鉱業セメント
市川 恒平	大阪商船三井船舶	丹野 秀昭	早大大学院
伊藤 達也	早大大学院	辻松 望	早大大学院
伊藤 多聞	早大大学院	飛澤 健司	早大大学院
逢坂 保一	大和総研	中里 勲	千代田生命
大久保 武人	東工大大学院	中島 裕	早大大学院
大繩 陽一	日本電気	中戸 毅之	早大大学院
大山 伸幸	早大大学院	中野 英一	早大大学院
岡崎 敏夫	第一勧銀コンピュータサービス	中名 哲也	日本電気
岡崎 朝夫	早大大学院	西取 将利	早大大学院
荻野 厚	早大大学院	萩原 義雄	東大大学院
小田 浩一郎	川鉄商事	濱松 幹雄	住友海上火災
小田 雅之	住友海上火災	早川 多美	ビギグループ
小加藤 悦至	日興証券	平野 庸	大和証券
金藤 貞人	日立製作所	比留川 孝	日本リース
神谷 太郎	早大大学院	藤田 拓也	松下電器産業
神山 雅子	早大大学院	古川 信一	松下電器産業
菊池 正紀	早大大学院	古谷 毅	住友建設
北村 嘉章	早大大学院	細川 哲夫	早大大学院
栗田 美香	早大大学院	松原 宏樹	東京電力
興水 美香	三菱電機	真鍋 彰浩	東洋信託
後藤 真也	早大大学院	丸谷 美穂	早大大学院
桜井 竜也	早大大学院	水谷 博司	東急不動産
佐々木 敏弥	九州石油	茂木 克紀	日産自動車
柴崎 剛	神戸製鋼所	森 直也	京セラ
白崎 崇裕	早大大学院	山口 孔丹子	松下通信工業
杉浦 正樹	松下通信工業	吉澤 徳子	通産省工技院公害資源研究所
杉中 秀彰	東工大大学院	吉田 昭夫	長銀総研
鈴木 康子	富士総研	吉田 久史	早大大学院

(平成元年12月18日現在)

平成元年度卒業予定者の進路 (大学院)

氏名	進路	氏名	進路
風間 武彦	常陽銀行	大野 寿一	松下電器産業
久保 知裕	昭和シェル石油	磯 真一郎	シュルンベルジェ
中川 隆之	野村総研	佐藤 岳彦	石油資源開発
前田 大作	住友セメント	伊藤 麻里子	ブレック研究所
植田 哲司	安田信託銀行	佐藤 太郎	昭和電工
加藤 清一	積水化学	瀧内 健夫	特許庁
亀山 恭行	旭硝子	瀧内 健夫	早大大学院後期課程
小池 学	三菱総研	鬼頭 朝子	早大大学院後期課程
足立 敏	就職せず	樋口 和男	川崎製鉄
安藤 裕孝	神戸製鋼所	今井 朋男	東京ガス
大久保 嘉人	日本興業銀行	高村 浩	三菱重工
加藤 幸男	日立製作所	田中 広樹	石油公団
森岡 右伍	旭硝子	小島 純	労働省産業医学総合研究所
黒岩 慎一郎	村田製作所	竹下 聡一郎	三菱化成
中永 秀彦	三菱鉱業セメント	加藤 潔	早大大学院後期課程
		瀬谷 正己	佐藤工業

(平成元年12月14日現在)

#### 4. 学位取得者 (平成元年度)

課程によらないもの (工学博士)

- 6月22日 戸田正作：使用済脱硫触媒からの  
MoおよびVの回収に関  
する研究
- 6月22日 土井和巳：我国後生ウラン鉱床と  
その地質環境
- 12月7日 大野 清：エネルギー貯蔵に関す  
る地下構造物の研究
- 12月7日 高橋信博：選鉱工場における粉碎  
工程の計画と操業管理に  
関する基礎的研究
- 2年3月 三室俊昭：堆積軟岩のスレーキン  
グおよび吸水膨張特性に  
関する地質工学的基礎研  
究

課程によるもの (工学博士)

- 3月 中山智晴：非破壊的手法に用いた  
採掘管理
- 3月 中村 聡：Crystal Chemistry of  
Hydroxyapatite and  
Tricalcium Phosphate  
(アパクト系生体材料  
の結晶化学的研究)
- 3月 Akskadi Djohar：セグレゲーション法  
および選鉱法の組合せに  
よるマンガンノジュール  
からのCu, NiおよびCoの  
回収
- 3月 E. Prasetyo Utomo：地下浅部調査に  
おける比抵抗法と強制分  
極法に関する研究

#### 5. 専任教員海外出張

今井直哉教授

5月25日～28日, 韓国動力資源研究所訪問,  
韓国鉱物学会招待講演

11月29日～12月4日, 韓国国立教育大学地  
球科学教室研究交流

橋本文作教授

4月20日～24日, 韓国鉱山学会で招待講演  
山崎豊彦教授

5月25日～6月3日, カナダ石油学会参加  
大和田秀二助教授

4月7日～7月4日, アルゼンチン, ブエ  
ノスアイレス鉱山地質局レアメタル指導  
岩崎孝教授, 名古屋俊士教授

平成2年3月12日～18日, 韓国, 塵肺対策  
指導

山崎淳司助手

7月10日～21日, オランダにてゼオライト  
国際会議論文発表

#### 6. 訃報

本年度下記の会員が逝去されました。謹ん  
でご冥福を祈ります。

6月26日 昭和47年 資源大学院修士

土居信一氏

12月4日 昭和21年 採冶 山崎純夫氏

#### 7. 平成2年度資源工学科専任教職員

平成2年度の教職員は次のとおりです。

教授	今井 直哉	資源科学研究所
〃	岩崎 孝	開発・環境工学研究室
〃	大塚 良平	資源科学研究室
〃	名古屋俊士	安全工学研究室
〃	橋本 文作	応用力学研究室
〃	原田 種臣	原料工学研究室
〃	山崎 豊彦	石油工学研究室
助教授	野口 康二	探査工学研究室
〃	大和田秀二	原料工学研究室
専任講師	内田 悦生	資源科学研究所
助手	山崎 淳司	資源科学研究所
〃	伊藤 宏行	石油工学研究室
職員	米持賢治	資源工学実験室
〃	吉田喜代子	資源工学事務室
学職	谷村 洋	資源工学実験室

なお平成2年度の学科主任および学級担任  
は次のとおりです。

学科担任 原田 種臣 教授

1年担任	大和田秀二	助教授	3年担任	名古屋俊士	教授
2年担任	岩崎 孝	教授	4年担任	山崎 豊彦	教授

**資源工学会会計報告**  
(平成1年度)

		(単位 円)	
<b>(1) 収 入</b>	<b>6,410,491</b>	<b>(2) 支 出</b>	<b>4,301,603</b>
<内 訳>		<内 訳>	
a. 繰越金	2,179,869	a. 印刷代 名簿代	1,478,400
b. 1年度会費	512,000	その他	245,110
c. 総会参加費	1,235,000	b. ハガキ・切手代	313,824
d. 奨学金	1,507,500	発送費	972,198
e. 記念品代	841,500	c. 総会関係支払	1,168,535
f. 記念品送料	25,260	d. 記念品代	55,852
g. タイピン売却代	1,300	e. 振込・振替手数料	46,624
h. 雑多入	8,062	f. 幹事会飲食代	1,060
		g. 弔 電	20,000
		h. 謝 金	
		<b>(3) 差引残高</b>	<b>2,108,888</b>

**編集後記**

■10年ぶりに資源工学会々報の編集に当ることになったが、この間多くの先輩教授のご退任とご逝去を経験し感慨無量のものがある。特に昨年暮、山崎純夫教授が亡くなられたことは同僚として寂寥の感、一入である。山崎純夫教授の業績については殆んどふれなかったが、石炭組織学分野では余人を持って替え難いものがある。ご冥福を祈る。■教室にはまた次々新人が登場され、新しい息吹が感じられ、教室の新展開を期待して止まない。■最近の資源工学科入学生及び卒業生については海外からの留学生、女子学生、就業状況などから、ご判断願えれば幸である。■大学全体については今年は理工学研究所50周年記念事業を迎えることとなり、各種のシンポジウムが開催されることになっている。また理工80周年記念事業の一環として、大学院及び理工学総合研究センターの新棟が建設されることになり、募金活動に入る予定です。先輩諸兄におかれましても振ってご協力下さい。(T. Y記)